



法人化に向かって動きだしたSAK  
『分かりやすい法人化のお話し』

1 法人とは  
今、私達の神奈川県スキー連盟は公的には全く人格をもたない組織であります。『えつ！だつて財団法人全日本スキー連盟に所属して、準指の検定や国体にも参加できることに』と疑問をもたれると思いますが、実を言うとオーバーにいえば幽霊団体なのです。私達はこの世に生を受けると、区役所等に出生届けを出し、一人の間として認められ、権利や義務をもつようになります。

2 なぜ法人化するのか  
面倒は止めて、今のままでは、とも思いますが、自前の事務所を持ち、六千人を越える会員を擁し、年間六千万円弱の金額の動く団体ではやはり人格を持つものでなければ、永続性と発展性を欠いてしまいます。

①財産の保全—現在の県連事務所の名義人は財団法人の県体協です。人格を持たないSAKの名義にできなかつたのです。事務所は実は法的には私達のものではないのです。念書を交わせ！言われますが、念書は法的には全く効力がなく、先々世代が代わると何だか分らなくなる恐れがあり、早く法人にして私達の名義にする必要があります。

3 決算の明確化—法人になると第三者による会計監査が義務付けられます。組織外の人（公認会計士）のチェックを受けると、従来の方より明解な決算ができます。内部監査だけでなく、外部の監査により更に公正さが

4 法人の種類と特性  
一般にスポーツ団体は財団か社団になります。

財団法人は基金を運用して事業を展開することから、発足時の基金は高額で、現在では約1億円が必要と言われています。

社団法人は、社員による事業運営の建前から基金はそれほど多額でなく（推定2／4千万円）設立できます。

共に、財産保全や、会計問題、寄付に関する事項はほぼ同等の機能を發揮致します。税制面では財團の方が有利ですが、基金に大きな差があり、当面社団法人化を目指す準備にかかりました。

5 今後の法人化活動  
準備委員会で詳細の詰めをしてしまったところ、各協会代表、更に学識経験者、執行部で組織します。並行して、監督官庁の指導を仰ぎ、組織、規約、基金等の準備に取り組み、申請書作成一つでも膨大な内容となり、相当の仕事量、時間を必要と聞き及んでおり、SAKの事務所等に出生届けをします。

6 法人化Q & A  
A …既に幾つか問題はありますし、解決しなければならない課題がいずれ発生します。

Q …もし法人化しなければどうなる

SAKだより

『分かりやすい法人化のお話し』

SAKだより

いますが、これは間の商売で、法的な保護は受けられないし、信用も持たれません。それでも一定の金額を越える収入があれば個人でも納税義務が生じます。

事業者は、企業（会社法人）でも、学校（学校法人）でも、宗教（宗教法人）でも登記して初めて人格を持つ団体になるのです。何らかの事業と金銭の授受が発生すればそれは事業者となり、我々のような団体でも同じことが言えるのです。

現に、SAJは財團法人として登記されており、東京都や長野県、北海道等のスキー連盟も同様です。

SIAは社団法人です。登記しない事業者を「みなし法人」と言つております、一定以上の収入には納税義務が生じています。

2 なぜ法人化するのか  
面倒は止めて、今のまでは、とも思いますが、自前の事務所を持ち、六千人を越える会員を擁し、年間六千万円弱の金額の動く団体ではやはり人格を持つものでなければ、永続性と発展性を欠いてしまいます。

3 法人化への導入経過  
3年前法人化について検討しようと、第1歩を踏み出しました。

各協会の代表者による「法人化検討委員会」を組織し、法人の種類、メリット／デメリット、どうしたら法人化できるか等について検討を開始し、ようやく今年度、法人化の可能性ありとの感触が得られ、同委員会を準備委員会に切り替えて評議員会の準備が残り仕事となっていました。2年間いやほほり掛かることがあります。

4 法人の種類と特性  
一般にスポーツ団体は財団か社団になります。

財団法人は基金を運用して事業を展開することから、発足時の基金は高額で、現在では約1億円は必要と言われています。

社団法人は、社員による事業運営の建前から基金はそれほど多額でなく（推定2／4千万円）設立できます。

5 今後の法人化活動  
當の建前から基金はそれほど多額でない（推定2／4千万円）設立できます。

6 法人化Q & A  
Q …既に幾つか問題はありますし、解決しなければならない課題がいずれ発生します。

A …既に幾つか問題はありますし、解決しなければならない課題がいずれ発生します。

Q …法人化するためには会費や協会、クラブの負担金は上がるのか？

A …既に幾つか問題はありますし、解決しなければならない課題がいずれ発生します



# 強化部

佐々木

平成四年度行事も無事終了することができました。ここに、会員の皆様のご協力・ご支援に対し厚く御礼申し上げます。

さて、振り返りますと、雪不足のためジュニア強化合宿、アルペン技術強化合宿ではボール練習を行なうことができました。各地のスキー場は滑走すらできませんでした。こうした条件の中で、フリー滑走を大切に行なった選手に各大会での活躍が見られました。ミニズノ杯の開催日、国体選考会の会場変更とあります。おおむね順調に行事を実施することができました。

またセッターライブでは15名の参加者があり、理論・実技ともに熱心に受講され、活発な質疑応答が行なわれました。今後とも研鑽されるよう期待いたします。

シーザン最後の大会、第7回野辺林スラローム大会では、技術・ルール・マナーにおいて見劣りする大会となってしまいました。安全な大会実施のためにも

技術の上達はもとより、競技規則の理解、マナーの向上を図っていただきたい。

昨年、お知らせいたしましたジュニアチームにつきましては8名の参加希望者がございました。平成四年度は行事、予算とも例年通りであつたため充分な活動ができるよう、検討を重ねて参りました。

平成十年の神奈川国体に向けて、今後とも充実した強化ができるよう、検討を重ねて参りました。

じます。





